人文科学研究　No.13, pp.135-150　　March 2017

児童期以降の快-不快感情を伴う自伝的記憶

―縦断的な事例データによる予備的検討―

上　原　　泉

要旨

本研究では、児童を対象として、半年から１年ごとに、快感情と不快感情を伴う出来事を１つずつ、縦断的に参加者に質問し、想起される内容や、その経験時期、エピソード性について検討した。その結果、不快感情を伴う記憶は「ない」という回答が半分強を占め、報告された中では「学校」に関する内容が比較的多かった。一方、快感情を伴う記憶では「学校」「家族」「友人」の順でこれらに関する内容が多く、小学生時点では「家族」に関する内容が、中学生以降の時期では「学校」に関する内容が比較的多かった。想起内容の経験時期とエピソード性についてみると、快感情を伴う記憶は、エピソード的な事柄が多かったが、小学生の時期には最近のエピソード的出来事の割合が高く、中学生以降になると、過去の一定期間にわたる継続的な事柄の割合が相対的に高まる傾向にあった。

問題

いつ、どこで、何をしたかという情報を含む、個人的な出来事に関する記憶のことをエピソード記憶というが、そのうち、思い出として残り、自分史の一部をなすような出来事の記憶のことを自伝的記憶という（上原，2012)。ただし、後々まで残っていくような思い出には単一の出来事ばかりではなく、「テニス部での活動が楽しかった」といった持続的な事柄もあるため、厳密にはエピソード記憶の一種というより、「過去の自己に関わる情報の記憶」(佐藤、2008) という方が適切である。自伝的記憶は自己のアイデンティティの形成や維持に深く関わっているうえ、精神的な健康状態と関連し、また、それを語ることで、他者との関係性の構築や維持にもつながるような機能を有していることから、記憶の基礎研究においてのみならず臨床や実践研究においてその関心は高まっている。

自伝的記憶の研究で主に追究されている点の１つが感情的側面である。自伝的記憶には感情を伴っている場合が多く、経験時期や個人の特性、個人の精神状況等と関わりあいながら、その伴う感情が快か不快かにより、後の想起量や想起のされ方が異なることが示唆されているからである。ここではまず、自伝的記憶と快-不快感情の関係に関する知見を簡単に概観する。

快-不快感情を伴う記憶を調べる主な方法として、短時間のうちに自由に想起させる方法や、快感情と不快感情を伴う出来事を１つずつ（例えば、今までで一番良かった・楽しかった出来事と一番悪かった・嫌だった出来事を）報告させる方法がある。前者の研究手法により、若年成人から高齢者にいたるまで、想起する自伝的記憶に伴う感情の比率はほぼ「快：不快：その他」＝「５～６：２～３：１～２」となっている（Berntsen & Rubin, 2002; 兵藤, 2003; 兵藤・野内, 2006; Kennedy, Mather, & Carstensen,

2004; 齋藤, 1993；1994; Waldfogel, 1948)。齋藤（1993；1994）は小学生でも同様の傾向を見出している。不随意記憶（無意図的に思い出す自伝的記憶）の想起で、不快感情を伴う方が多いという知見（神谷, 1997; 2003）もあるが、相対的には、快感情を伴う内容の想起率の方が高いと言われている（Walker, Skowronski, & Thompson, 2003)。また、40歳以上の成人、特に高齢者では、10代終わりから30代初めの出来事ほどよく思い出せるという、レミニッセンス・バンプ（Rubin, Wetzler & Nobes, 1986）がみられるが、不快感情を伴う出来事のみに想起を限定するとこの現象はみられず、快感情を伴う出来事のみに想起を限定するとこの現象がみられる（Berntsen & Rubin, 2002; Rubin & Berntsen, 2003)。このバンプの時期に相当する10代終わりから30代初めに経験される、快感情を伴う出来事の多くが、ライフスクリプト的な出来事（自分が所属する文化圏で通常多くの人が経験するとされる出来事。例えば、結婚、小学校入学など）であるとの指摘がある（e. g., Berntsen & Rubin, 2004)。

もう１つの主要な研究手法である、快感情と不快感情を伴う出来事を１つずつ想起させた研究では、以下のような報告がある。高齢者では若年成人と比較し、不快感情を伴う出来事をポジティブにとらえようとする傾向が強いこと（Comblain, D'Argembeau, & Van der Linden, 2005)、快感情を伴う記憶の方が不快感情を伴う記憶よりも、感覚的、時間的、文脈的な側面をよく覚えていること（Schaefer & Philippot, 2005)、大学生と中年期の成人で快感情を伴う（一番良かった）出来事は17, 18歳頃が最も多かったのに対して不快感情を伴う（一番悪かった）出来事の経験時の年齢には偏りがなく、想起される快感情を伴う出来事はライフスクリプト的な内容が多いのに対し、想起された不快感情を伴う出来事には特徴がないこと（Collins, Pillemer, Ivcevic, & Gooze, 2007）等である。

いずれの研究方法においても、成人、高齢者における、快感情と不快感情を伴う出来事の、経験時期との関係を含む想起量や想起のされ方、鮮明さに関わる知見が多い。ごく一部で、内容の分類は行われてはいるが、ライフスクリプトとの重なりの比率や内容がカテゴリー化できるかなど、大雑把な分析に限られる（Collins et al., 2007; Ece & Gülgöz, 2014; Haque & Hasking, 2010)。具体的な内容やその発達的変化、文化差や性差、また、長期的にみた場合に同じ内容が繰り返し想起されやすいのかといった点は、これまで筆者の知る限り検討されていない。しかも、児童や中高生を対象とした、自伝的記憶の感情的側面や内容に関する分析については、僅少である。

そこで、本研究では、児童期以降の子どもを対象に、快感情と不快感情を伴う出来事（今までで一番楽しかった出来事と嫌だった出来事）を１つずつ報告させる方法により、少人数の事例研究ではあるが長期的に追跡しデータ数を蓄積することで量的に分析し、児童期から思春期にかけての、快感情と不快感情を伴う記憶内容の特徴を明らかにすることを目的とした。縦断的研究の特徴を生かし、長期的にみた場合に同じ内容が繰り返し想起されやすいのかという点も予備的に検討することとした。内容分析の際には、個人間の回答数をあわせて、その内容の比率をもとめ分析する方法がとられている（Ece & Gülgöz, 2014; Haque & Hasking, 2010)。本研究でもその手法で分析することにした。

方法

参加者

７人（男子４人［A～D］、女子３人［E～G］）の子どもに長期的に協力をお願いした。本調査への協力をお願いした期間とインタビュー回数は表１のとおりである。本調査の概要と実施方法については、子ども本人と付添いの母親に随時説明し、毎インタビュー時に子どもと母親に同意いただけるかを確認した

うえで、子どもと母親の双方から同意書への署名をいただき、調査を実施した。なお、すべての子どもと母親から許可を得て、インタビュー場面については、ビデオ撮影を行っている。

本調査は、複数の調査内容から成る、１、２歳台から参加いただいている縦断的研究のうち、児童期半ば以降に参加いただいた調査の１つである。４名（男児１名と女児３名）は上原（1998）の、６名（男児３名と女児３名）が上原（2014）の参加者であり、７名全員がUehara(2015)への参加者だが、いずれの研究も幼児期のデータに基づく調査研究であり、児童期以降のデータに基づく本調査内容とは異なっている。

表１：参加者の性別、参加年齢とインタビュー回数

参加者	性別	参加した年齢	インタビュー回数
A	男	7歳6か月～13歳6.5か月	12
B	男	7歳1か月～12歳8か月	10
C	男	9歳7か月～22歳1か月	26
D	男	7歳8か月～19歳11か月	22
E	女	9歳9か月～21歳2か月	18
F	女	10歳0.5か月～16歳7.5か月	13
G	女	10歳0.5か月～19歳4か月	8

手続き

インタビュー調査をほぼ半年ごとに（協力者Ｇについてはほぼ１年ごとに）縦断的に行った。インタビューの実施場所は、主に母親の要望に従い、研究室もしくは参加者宅であった。調査は、調査者（筆者）が単独ですべて行った。インタビュー調査内で、毎回、快感情と不快感情を伴う個人的な記憶を問うのに、以下の２つの質問が書かれた用紙を提示し、記入をもとめた。

＊あなたにとって、今までで、いちばん楽しかった出来事はなんですか.
その出来事の内容とそのときの年令について書いてください。
＊あなたにとって、今までで、いちばん嫌だった出来事はなんですか.
その出来事の内容とそのときの年令について書いてください。

ただし、参加者Ａにおける最初の４回、Ｃにおける最初の５回、Ｄにおける最初の４回は、本人の希望により口頭で答えてもらった。それ以外はすべて筆記で答えてもらった。口頭で答えてもらった部分については、その場でメモをとるとともに、後からビデオ音声で確認し、発言どおりに文字化した。快、不快感情を伴う記憶を長期にわたり追跡した研究はこれまで見当たらず、同じ出来事が最も楽しい出来事として印象に残り続けるのか、といった点の検討も、本研究の目的の１つであったため、繰り返し報告された内容も含めて分析した。分析対象となったデータ数は、快感情、不快感情を伴う記憶報告それぞれ109個ずつで、小学生時に想起した内容がそれぞれ46個ずつ、中学生以降の時期に想起したのが63個ずつであった。回答のほとんどが一文か二文からなる短いものであった。それらをカテゴリーに分類し分析することとした。

データは次の４点について、カテゴリーに分類した。第一に内容の分類、第二に内容の詳細な分類（下位分類）、第三にエピソードか持続的な事柄かの分類、第四に、経験時もしくは経験時間に関する時間の

分類であった。それぞれのカテゴリー分類基準は表２、表３のとおりであった。

表２：内容の分類

内容分類	下位分類
学校	部活に関する事
	行事に関する事
	授業や通学等（日常）に関する事
	先生に関する事
	学校での怪我に関する事
学校外の学習・習い事	習い事に関する事
	塾に関する事
	受験
家族	家族でお出かけ・旅行
	家族との日常的な事柄
自分自身	怪我・病気
	趣味（個人的・学校外）
友人	日常的な遊び
	友達とのけんか
	友達とお出かけ
気分・姿勢	
アルバイト	
なし	

表３：エピソード／継続性と時期の分類

エピソード／継続性の分類	時期に関する分類
エピソード	今・最近（1か月以内）
	過去の一時点
継続的な事柄	今・最近（１か月以内）
	日常・過去から現在まで続いている
	過去の一定期間

分析に入る前に、誰が行っても同様に分類できるようになっているカテゴリー設定であるかを確認するため、「ない（なし）」という回答以外のデータのうちの２割程度をランダムに選び、調査者と目的を知らない研究者Ａが、最初に独立に表２、３の基準に基づき、カテゴリー分類を行った。その結果、内容分類の１箇所をのぞき（κ=0.95）、エピソード性／持続性と時間の分類についてはすべて一致していた（κ=１）。内容分類の１箇所について、研究者Ａから２つの分類カテゴリーのどちらにするか迷うとの報告がなされたが、子どもの作文に欠落していた情報について話し合うことで解決し、最終的には一致したカテゴリーに分類できた。一致の度合いは完全一致に近く、カテゴリーの設定に問題がないことが確認されたため、残りのデータの分類については、調査者が行った。カテゴリーに分類した後のデータに基づき、分析を行った。

結果

快感情と不快感情を伴う記憶の内容

感情の快、不快に関わらず、「なし」という報告を除き、全ての回答データに占める割合の高かった3つの内容カテゴリーは、「学校」(29.8%)、「家族」(18.3%)、「友人」(11.5%)であった。一番楽しかった出来事の記憶(以下では、快感情を伴う記憶と呼ぶ)と一番不快だった出来事の記憶(以下では、不快感情を伴う記憶と呼ぶ)の内容カテゴリーごとの比率を表したのが図1である。快感情を伴う記憶と不快感情を伴う記憶の間でその分布に有意な差がみられた($\chi^2=50.0$, $df=7$, $p<.01$)。残差分析を行ったところ、「家族」「友人」「なし」のカテゴリーで有意な差がみられた($p<.01$)。不快感情を伴う記憶は、ほぼ5割の回答で「なし」となっており、快感情を伴う記憶と比較し、「なし」という回答の比率が有意に高く、「家族」と「友人」に関する内容の比率は有意に低かった。なお、「学校」に関する内容の比率は、快感情、不快感情を伴う記憶とも最も高い比率であったが、両者の比率の間に有意な差はなかった。

次に、想起した時期が小学生の時だったか、中学生以降の時期であったかで、想起される快感情と不快感情を伴う記憶の内容に違いがあるかを検討した。小学生の時と中学生以降の時期に分けて、快感情、不快感情を伴う記憶の内容ごとの比率を表したのが図2、図3である。その結果、快感情、不快感情を伴う記憶のいずれにおいても、内容ごとの比率に、2つの想起時期の間で有意な差があることが示された(快感情:$\chi^2=38.1$, $df=7$, $p<.01$;不快感情:$\chi^2=20.6$, $df=7$, $p<.01$)。残差分析を行ったところ、快感情を伴う記憶においては、「家族」に関する内容の比率が小学生時点のほうが有意に高く、「学校」に関する内容の比率は中学生以降の時期のほうが有意に高いことが示された(いずれも$p<.01$)。不快感情を伴う記憶においては、「家族」に関する内容が、どの参加者においても中学生時期以降には報告されておらず、小学生時点のほうが、その報告比率が有意に高かった($p<.01$)。なお、不快感情を伴う記憶における「学

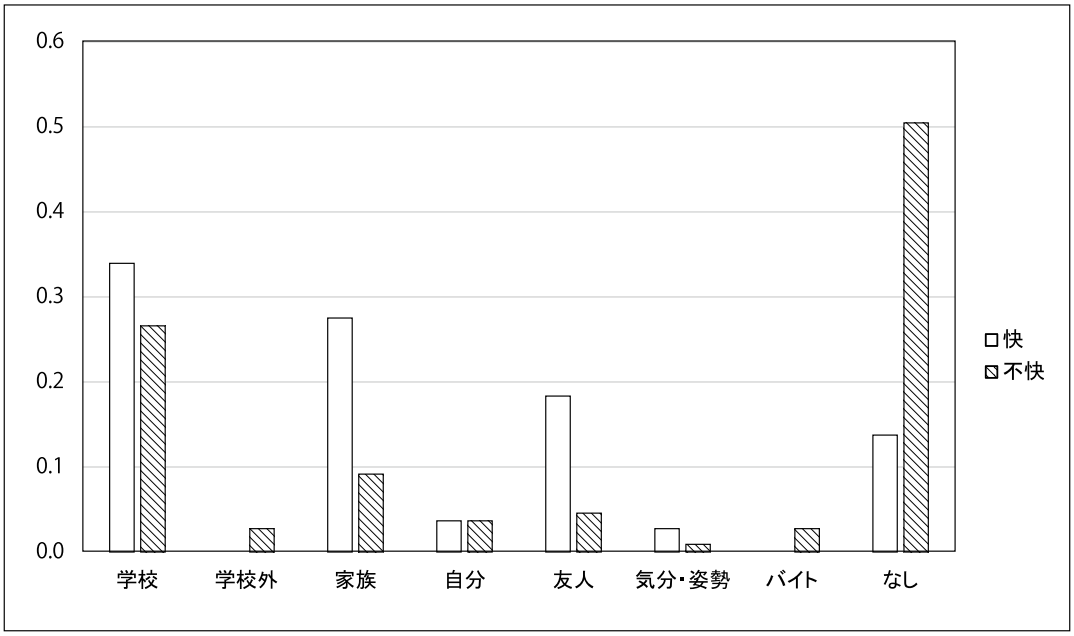

図1:快感情と不快感情を伴う記憶の内容ごとの比率

(＊本論文内の全ての図の縦軸は比率を、横軸は分類カテゴリーを表す)

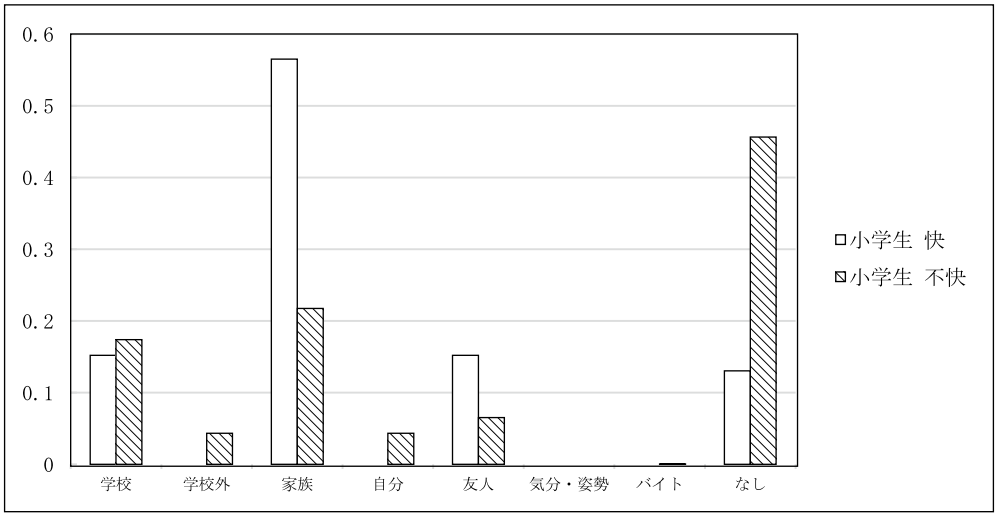

図２：小学生時に想起した、快感情と不快感情を伴う記憶の内容ごとの比率

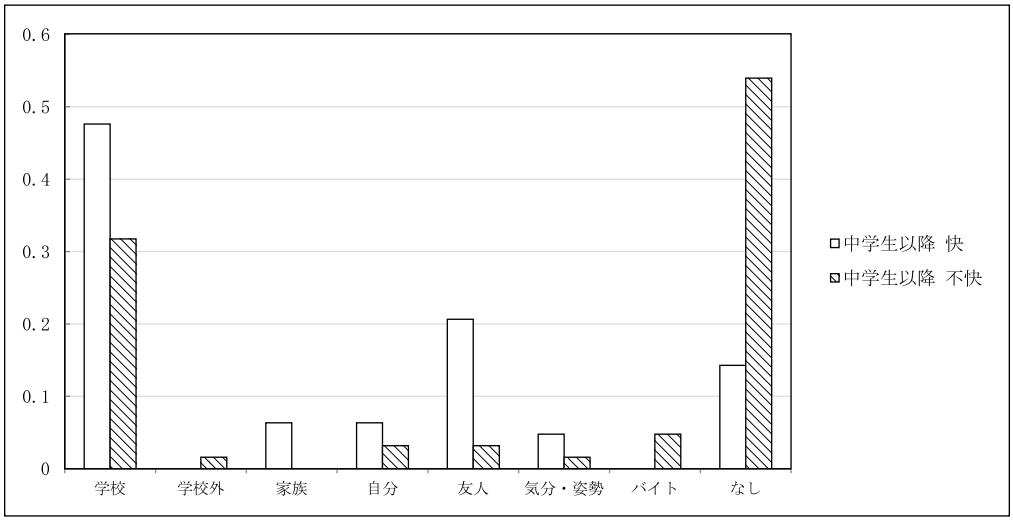

図３：中学生以降に想起した、快感情と不快感情を伴う記憶の内容ごとの比率

校」に関する内容の比率は、中学生時期以降のほうが高かったが、残差分析では、小学生時点との比率差は有意傾向であった（$p < .1$）。

内容カテゴリーをさらに細かくわけた、下位カテゴリーごとの、快感情と不快感情を伴う記憶の比率を表したのが図４である。下位カテゴリー間で比率差の統計分析をするにはデータ数が十分ではないため、簡単に述べるにとどめるが、全体として、「学校」に関する内容の中では「行事」、「家族」に関する内容の中では「お出かけ（旅行を含む）」が、各カテゴリー内で２割前後と特に言及が多かった。データを蓄積することで、今後の検討課題としたい。

以上より、小学生の時は、学校に関する内容への言及もあるが、家族に関する内容への言及が圧倒的に多く、特に家族での旅行やお出かけは、快感情を伴う出来事として認識されていることが示された。一方、中学生以降になると、家族に関する内容への言及は少なくなり、学校に関する内容への言及が圧倒的に多

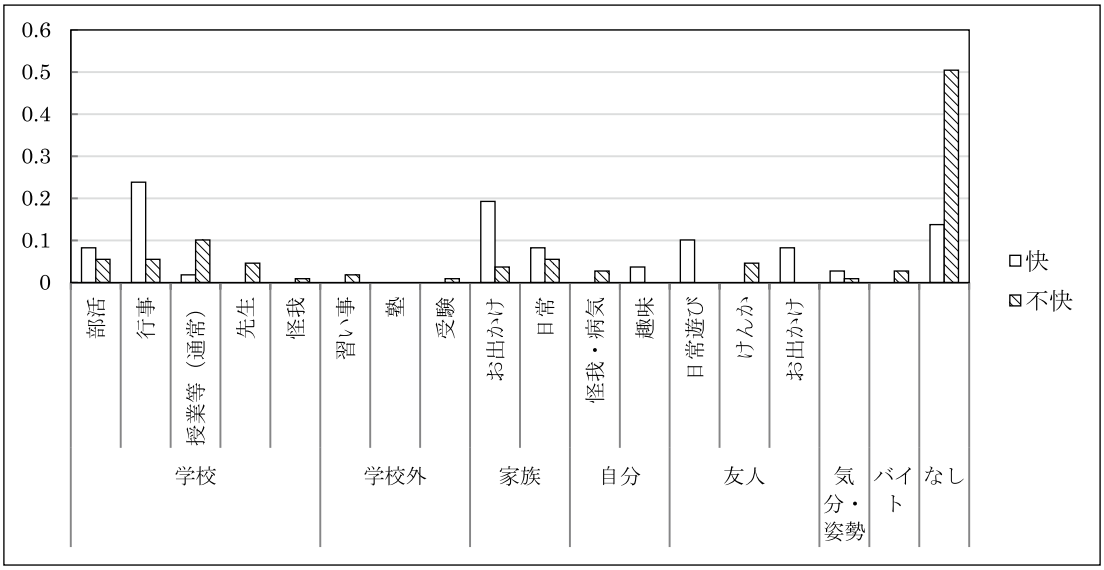

図 4 ：快感情と不快感情を伴う記憶の下位カテゴリーごとの比率

くなっている。思春期以降の若年世代では、学校に関わる事柄が、関心事の中心になることを示唆していると思われる。

快感情と不快感情を伴う記憶のエピソード性／継続性と経験時期

エピソード性／継続性と経験時期の分類に基づき、快感情と不快感情を伴う記憶のカテゴリーごとの比率を表したのが図 5 である。快感情と不快感情を伴う記憶の間でその分布に有意差がみられた（χ^2= 40.8, df=5, p < .01）。残差分析を行ったところ、「エピソード的事柄・最近」（最近経験したエピソード的事柄）、「エピソード的事柄・過去の一時点」（過去に経験したエピソード的事柄）において、快感情を伴う記憶の比率の方が有意に高かった（p < .01）。次に、想起した時期が小学生の時だったか、中学生以降の時期であったかで、想起される快感情と不快感情を伴う記憶の、エピソード性／継続性と経験時期のカテゴリーごとの分布に違いがあるかを検討した。小学生の時と中学生以降の時期に分けて、快感情、不快感情を伴う記憶の、そのカテゴリーごとの比率を表したのが図 6 、図 7 である。不快感情を伴う記憶では、小学生時点と中学生以降の時期の間で、カテゴリーごとの比率の分布に有意差はなかったが（χ^2= 4.59, df=5, p > .05）、快感情を伴う記憶では有意差がみられた（χ^2=18.9, df=5, p < .01）。残差分析を行ったところ、小学生時点の方が「エピソード的事柄・最近」すなわち、最近のエピソード的出来事の報告の割合が有意に高く、中学生時期以降の方が「継続的事柄・過去の一定期間」すなわち、過去の一定期間にわたる継続的な事柄の報告の割合が有意に高かった（いずれもp < .01）。

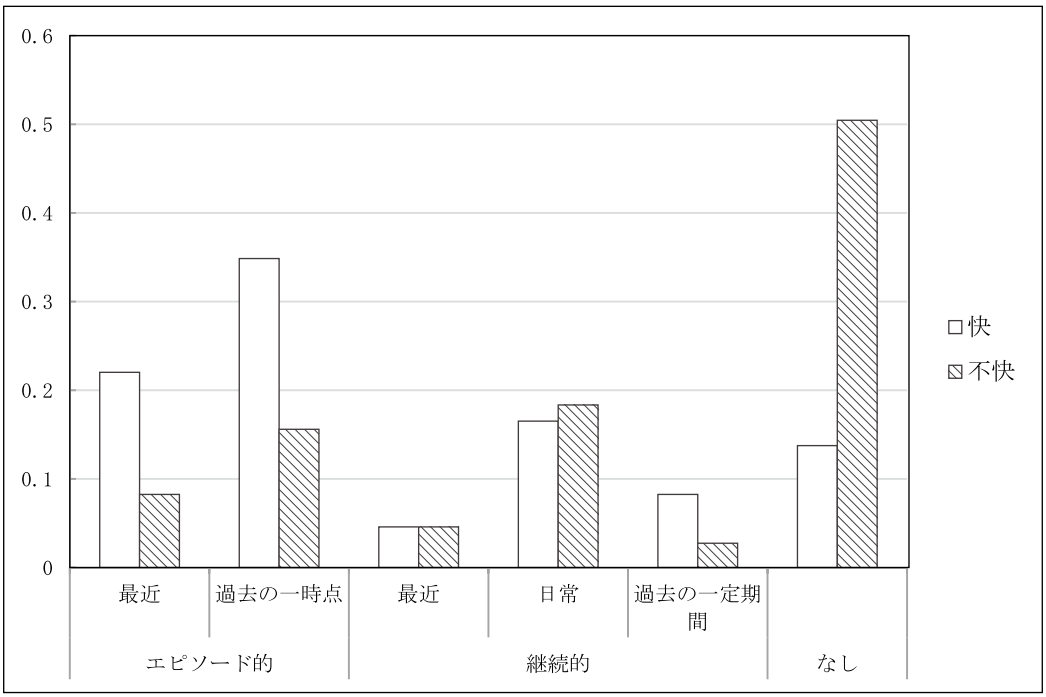

図５：快感情と不快感情を伴う記憶のエピソード性／継続性と経験時期ごとの比率

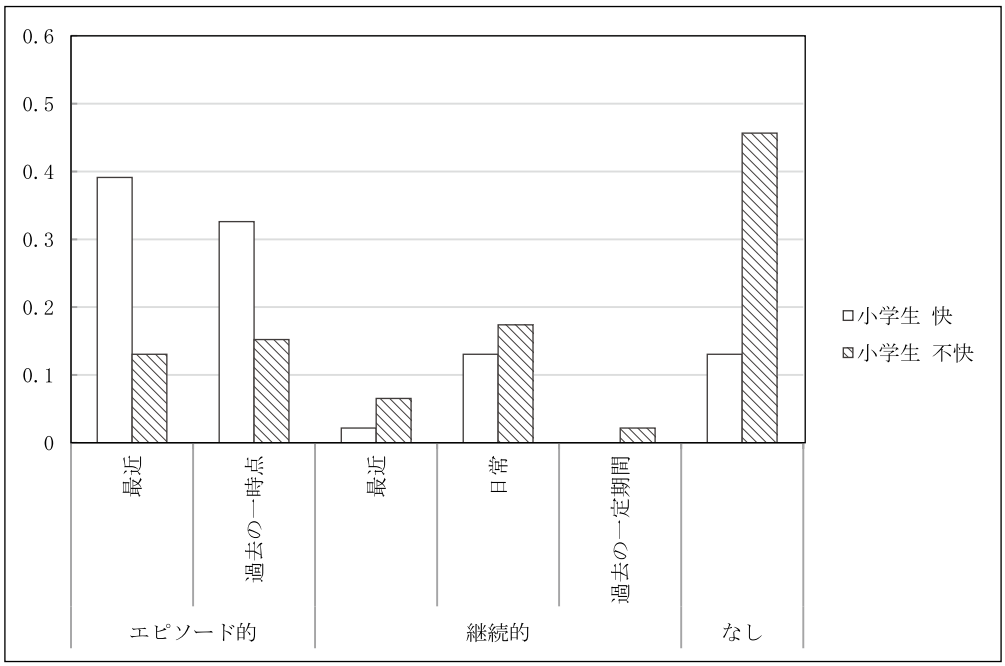

図６：小学生時に想起した、快感情と不快感情を伴う記憶のエピソード性／継続性と経験時期ごとの比率

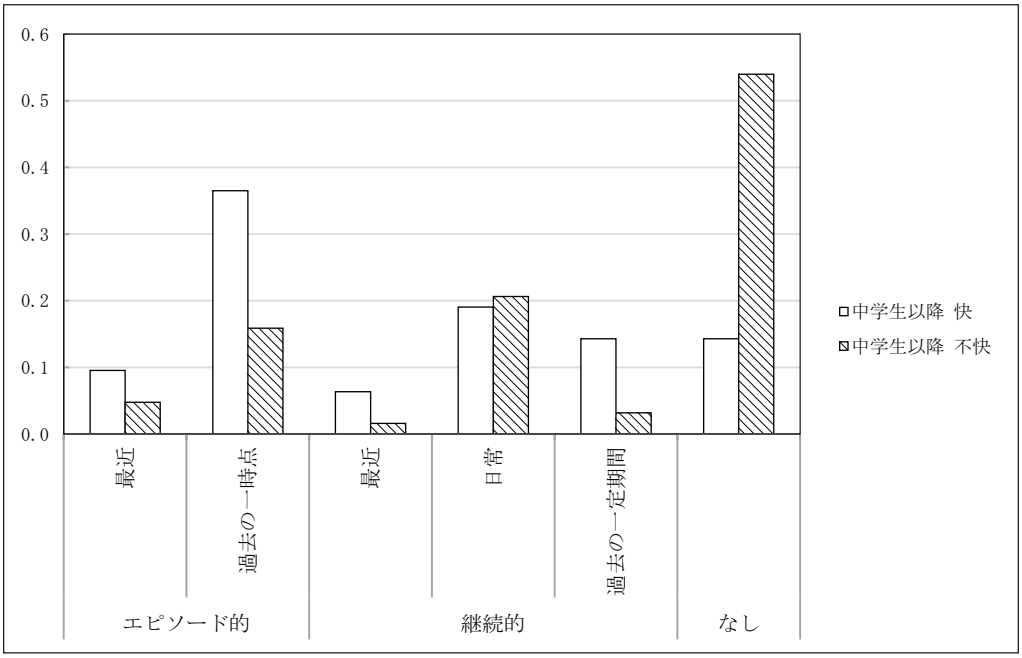

図７：中学生以降に想起した、快感情と不快感情を伴う記憶のエピソード性／継続性と経験時期ごとの比率

快感情と不快感情を伴う記憶内容の報告の一貫性

快感情を伴う記憶（一番楽しかった出来事の記憶）と不快感情を伴う記憶（一番不快だった出来事の記憶）として、繰り返し同じ事柄が想起されやすいのかという点については、従来の基礎研究ではほぼ検討されてこなかった。参加者ごとに、繰り返し言及された内容を示したのが、表４～表７である。参加者Ａでは、「楽しかった出来事」の２箇所に「家族旅行」とあるが、これは同じ「家族旅行」について２回言及したことを意味する。参加者Ｃでは、「学校旅行１」への言及が３回なされ、それとは別の「学校旅行２」への言及が２回なされたことを意味する。空欄は、すべて異なる内容が報告されたことを意味する。不快な出来事の「なし」を除き、繰り返し言及される内容はあまり多くはないことがわかる。参加者間で共通して、繰り返し言及された「楽しかった出来事（快感情を伴う記憶）」は、「家族旅行・お出かけ」か「学校旅行」であった。一方、偶然かもしれないが、繰り返し言及された「不快だった出来事（不快感情を伴う記憶）」は女子のみにみられ、いずれも「学校」に関する内容で、しかも２人においては「先生」や「部活」の仲間との関係性に関する継続的な事柄であった。家族や学校での旅行というのは後々まで楽しい思い出として残りやすく、一方、エピソードというより継続的な関係性といったものが、不快な記憶として残りやすい可能性が考えられるが、データ数が少ないため、そこに性差があるのかも含め、今後の課題としたい。

表４：繰り返し報告された内容（参加者A, B）

参加者A	楽しかった出来事			不快な出来事		
男	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
7 y, 6 m						
8 y, 1 m						ない
8 y, 7 m						
9 y, 1 m						
9 y, 7 m	家族旅行					ない
10 y, 0 m		友人				
10 y, 7 m		友人				
11 y, 1 m						ない
11 y, 6 m	家族旅行					
12 y, 1 m						
13 y, 1.5 m						
13 y, 6.5 m						ない

参加者B	楽しかった出来事			不快な出来事		
男	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
7 y, 1 m						ない
8 y, 1 m						ない
8 y, 7 m						
9 y, 0 m						ない
9 y, 7 m	家族旅行					
10 y, 0 m						
10 y, 8 m						ない
11 y, 7.5 m						ない
12 y, 1 m	家族旅行					
12 y, 8 m	家族旅行					ない

表５：繰り返し報告された内容（参加者C）

参加者Ｃ	楽しかった出来事			不快な出来事		
男	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
9 y, 7 m			ない			
10 y, 0 m						ない
10 y, 6 m			ない			ない
11 y, 0 m			ない			ない
11 y, 6 m						ない
12 y, 0 m			ない			
12 y, 6 m	学校旅行１					
13 y, 1 m	学校旅行１					ない
13 y, 6 m	学校旅行１					ない
14 y, 0.5 m						ない
14 y, 5.5 m	学校旅行２					ない
15 y, 1 m	学校旅行２					
15 y, 6 m			ない			ない
15 y, 10.5 m			ない			ない
16 y, 6 m			ない			ない
17 y, 1.5 m						ない
17 y, 7 m			ない			ない
18 y, 1.5 m			ない			
18 y, 6 m		部活				ない
19 y, 1.5 m		部活				ない
19 y, 6 m		部活				
20 y, 1 m		部活				
20 y, 6 m		部活				ない
21 y, 0 m		部活				ない
21 y, 5.5 m		部活				ない
22 y, 1 m		部活				ない

表６：繰り返し報告された内容（参加者D, G）

参加者Ｄ	楽しかった出来事			不快な出来事		
男	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
7 y, 8 m						ない
8 y, 5.5 m						
9 y, 0 m						
9 y, 6.5 m						
10 y, 7 m						ない
11 y, 0 m						
11 y, 5.5 m						
12 y, 0 m						
12 y, 5 m						
13 y, 1 m			ない			
14 y, 1 m						ない
14 y, 6.5 m			ない			ない
15 y, 1.5 m						ない
15 y, 5.5 m			ない			ない
16 y, 2 m			ない			ない
16 y, 6 m						ない
17 y, 2 m		趣味				ない
17 y, 6 m		趣味				
18 y, 1 m						
18 y, 7 m						
19 y, 3 m						ない
19 y, 11 m						

参加者Ｇ	楽しかった出来事			不快な出来事		
女	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
10 y, 4 m						ない
11 y, 4.5 m						
13 y, 4.5 m	学校旅行					ない
14 y, 4.5 m	学校旅行			学校行事		
15 y, 3.5 m	学校旅行			学校行事		
16 y, 4.5 m	学校旅行			学校行事		
17 y, 4.5 m	学校旅行			学校行事		
19 y, 4 m				学校行事		

表７：繰り返し報告された内容（参加者E, F）

参加者E	楽しかった出来事			不快な出来事		
女	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
9 y, 9 m						
10 y, 3 m	家族お出かけ				先生	
10 y, 8 m	家族お出かけ				先生	
11 y, 1 m						
11 y, 9 m						ない
12 y, 5 m						
13 y, 1 m						ない
13 y, 8 m						ない
14 y, 3.5 m						
14 y, 9 m						ない
15 y, 4 m						ない
16 y, 4 m						
17 y, 3 m		友人				ない
17 y, 8 m		友人				ない
18 y, 5 m		趣味				ない
19 y, 1 m		趣味				
20 y, 1 m		趣味				
21 y, 2.5 m						ない

参加者F	楽しかった出来事			不快な出来事		
女	エピソード	持続的	ない	エピソード	持続的	ない
10 y, 0.5 m						
10 y, 6 m						
11 y, 0.5 m						ない
11 y, 7 m			ない			ない
12 y, 1 m						ない
12 y, 7 m	学校旅行					ない
13 y, 0 m					部活	
13 y, 7 m	学校旅行				部活	
14 y, 0 m						
14 y, 7 m						
15 y, 1 m					先生	
15 y, 8 m					先生	
16 y, 7.5 m						

考察

本調査結果は以下のようにまとめられる。まず、不快感情を伴う記憶は、半分強も「ない」として報告されていない。内容に目を向けてみると、不快感情を伴う記憶の中では「学校」に関する内容の割合が比較的高く、快感情を伴う記憶では、「学校」「家族」「友人」の順で、それらに関する内容への言及が多いことが示された。繰り返し思い出されやすい快感情を伴う内容は、「学校の行事」や「家族のお出かけ（旅行含む）」であった。ただし、小学生時点と中学生以降の時期では、想起されやすい内容に違いがあることもわかった。小学生時点のほうが「家族」に関する内容が、中学生以降の時期になると「学校」に関する内容が多い傾向にあった。エピソード性と経験時期についてみると、快感情を伴う記憶においては、特別なエピソード的な内容が多く、しかも、小学生の時の方が最近のエピソードを報告しやすく、中学生以降になると、過去の一定期間の持続的な事柄（部活に関することなど）への言及が増える傾向が示された。

本調査結果の意義について述べたい。これまで海外の研究では、自伝的記憶の想起内容は十分に検討されてこなかった。感情語を手がかりにして自由に想起させた中高年の想起内容（Haque & Hasking, 2010）や、皆が経験するような典型的経験というより自分が経験した重要な出来事を中高年に想起させた内容（Ece & Gülgöz, 2014）、快、不快感情を伴う記憶内容とライフスクリプトの重なりの程度（Collins et al., 2007）等が報告されているが、いずれにおいても中高年や成人を対象に、大雑把な内容分類しか行われておらず、小学生や中高生が想起する内容や発達差、文化差、性差などの詳細な分析は見当たらない。国内では、中間報告の段階ではあるが、中学生と高校生に本調査と同じ方法で想起させた場合の想起内容（川﨑・上原, 2014）と高齢者に自由に想起させた場合の想起内容（屋沢・上原・御領, 2014）が報告されている。前者の海外の知見と、後者の国内の知見、本調査結果を比較すると、日本では海外よりも、「学校」における経験が自伝的記憶の１カテゴリーを形成するほど、「学校」での経験は、重視されている可能性が考えられる。特に、本調査で示唆された、児童期よりも、中学生以降（20歳頃まで）の時期において「学校」に関する経験の想起率が顕著に高かった点は注目に値する。中高生の時期は、「学校」が生活や関心事の中心となっている可能性が高く、その点を考慮して、中高生の精神的健康に関わる支援のあり方を検討していく必要があるかもしれない。さらに、事例数が少ないとはいえ、データを集積することで、本調査のみが示唆した特筆すべき点は以下のとおりであろう。まず、不快感情を伴う記憶に関して「ない」という回答率が高かった点である。文化を問わずみられる傾向なのか、日本に限った特徴なのかは今後検討していく必要があるが、若年であるほど、不快感情を伴う記憶は忘れ去られやすい可能性が考えられる。ただし、本調査が示した留意すべき点は、不快感情を伴う内容が想起される場合、快感情を伴う記憶と比較し、エピソードというより日常的な内容を主とする継続的な事柄の占める割合が高いという点である。２人の女子のみで偶然みられた傾向かもしれず、推測の域をでないが、継続的に不快な事柄は、場合によっては、継続的に後々まで想起されやすくなり、内容によっては、精神的健康に負の影響を及ぼす可能性も考えられる。いずれにせよ、快感情を伴う自伝的記憶とは区別して、不快感情を伴う自伝的記憶の機能とその発達や変遷過程を追究していく必要があると考える。また、小学生時点と中学生以降で想起されやすい内容が、「家族」から「学校」へ変わっていく可能性を、個人内の変化としても示唆することができた点である。児童期から思春期にいたる具体的な変化の過程や個人差を明らかにするには、さらなるデータの蓄積が必要と考える。

本研究のように、自伝的記憶の発達や変遷過程を縦断的に追究することで、個人内の内面の変化やそれに応じた発達的支援について、有用な示唆を得られる可能性が考えられ、それらの点も含めて今後追究していきたい。

引用文献

Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic, and involuntary memories. *Psychology & Aging*, **17**, 636-652.

Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2004). Cultural life scripts structure recall from autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **32**, 427-442.

Collins, K. A., Pillemer, D. B., Ivcevic, Z., & Gooze, R. A. (2007). Cultural scripts guide recall of intensely positive life events. *Memory & Cognition*, **35**, 651-659.

Comblain, C., D'Argembeau, A., & Van der Linden, M. (2005). Phenomenal characteristics of autobiographical memories for emotional and neutral events in older and younger adults. *Experimental Aging Research*, **31**, 173-189.

Ece, B. & Gülgöz, S. (2014). The impact of suppressing the typical life events on the reminiscence bump. *Applied Cognitive Psychology*, **28**, 702-710.

Haque, S., & Hasking, P. A. (2010). Life scripts for emotionally charged autobiographical memories: A cultural explanation of the reminiscence bump. *Memory*, **18**, 712-729.

兵藤宗吉（2003）．自伝的記憶と忘却に関する研究(1)．日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 712.

兵藤宗吉・野内 類（2006）．感情と記憶に関する研究(11)―小学校時代の自伝的記憶と将来の出来事―．日本認知心理学会発表論文集, 4, 91.

神谷俊次（1997）．エピソード場面刺激による感情喚起が記憶に及ぼす影響．心理学研究，**68**, 290-297.

神谷俊次（2003）．不随意記憶の機能に関する考察―想起状況の分析を通じて―．心理学研究，**74**, 444-451.

川﨑采香・上原 泉（2014）．思春期から青年期における自伝的記憶とライフスクリプトの発達過程について．日本理論心理学会第60回大会発表要旨，5.

Kennedy, Q., Mather, M., & Carstensen, L. L. (2004). The role of motivation in the age-related positivity effect in autobiographical memory. *Psychological Science*, **15**, 208-214.

Rubin, D. C., & Berntsen, D. (2003). Life scripts help to maintain autobiographical memories of highly positive, but not highly negative, events. *Memory & Cognition*, **31**, 1-14.

Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. (1986). Autobiographical memory across the adult lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory* (pp. 202-221). New York: Cambridge University Press.

齋藤洋典（1993）．自伝的記憶 (1)：感情を随伴する事象の想起に及ぼす想起時期の効果．日本教育心理学会総会発表論文集，35, 182.

齋藤洋典（1994）．自伝的記憶（2）：高齢者による感情随伴事象の想起特性．日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 414.

佐藤浩一（2008）．自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性　佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）自伝的記憶の心理学（pp. 2-18.）北大路書房

Schaefer, A, & Philippot, P. (2005). Selective effects of emotion on the phenomenal characteristics of autobiographical memories. *Memory*, **13**, 148-160.

上原 泉（1998）．再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係―縦断的調査による事例報告―．教育心理学研究，**46**, 271-279.

上原 泉（2012）．子どもにとっての幼少期の思い出　清水由紀・林創（編著）他者とかかわる心の発達心理学（pp.183-196.）金子書房

上原 泉（2014）．心的用語の理解と過去のエピソードの語りの発達的関係―縦断的な事例データによる予備的検討―．お茶の水女子大学人文科学研究，**10**，111-121.

Uehara, I. (2015). Developmental changes in memory-related linguistic skills and their relationship to episodic recall in children. *PloS one*, *10*(9), e0137220. doi:10.1371/journal.pone.0137220

Uehara, I. (2016). Pleasant and unpleasant autobiographical memories recalled by students during

school days: A preliminary investigation using longitudinal case studies. Paper presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama. Abstracts of *The 31st International Congress of Psychology* are in CD-ROM.

Waldfogel, S. (1948). The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, **62**, 1-39.

Walker, W. R., Skowronski, J. J., & Thompson, C. P. (2003). Life is pleasant—and memory helps to keep it that way! *Review of General Psychology*, **7**, 203-210.

屋沢 萌・上原 泉・御領 謙 (2014). 想起された出来事の感情価からみた高齢者の自伝的記憶におけるレミニセンス・バンプの特性. 日本発達心理学会大会発表論文集, 25, 187.

付記

本研究は、31st International Congress of Psychologyで発表した内容(Uehara, 2016)を加筆修正し、論文化したものです。お子様と保護者の皆様には長期にわたり調査にご協力いただき、心よりお礼申し上げます。